順正寺報第２６号

永代経

風薫る五月、貴家皆々様には御健勝にてお過ごしの御事と存じます。

さて、例年の通り下記により「永代経法要（えいたいきょう）」を厳修します。

「永代経法要」とは、「私」が子供や孫そして子孫の幸福を願うと同じ様に、「私」に幸せで有って欲しいと願って下さっている御先祖に感謝の思いを込めてつとめる大切な行事です。

常日頃、生活の多忙さにかまけて、ついつい忘れている御先祖のお陰に気付き、仏恩報謝（ぶっとんほうしゃ）のひとときを共に過ごしましょう。

萬障繰合せ御参詣下さい。

御案内

記

五月四日（土）午后一時より

読経（衆僧供養）

法話　おとき　その他

※当山順正寺では永代経志を左記に定め、過去帳に記載し永代供養致しております。御希望の方は、住職迄お申し出下さい。

◎永代経（祥月命日読経）金、壱拾萬円也

◎特別永代経（毎月命日読経　祥月命日特別読経）金、参拾萬円以上

以上

壇信徒各位殿

順正寺　住職

幼稚園日記（後編）

副住職　江口　貫正

「ウー」

唸りながらマグカップに水を満たし、電子レンジにいれる。新聞に目を通し、湯になるのを待つ。「チーン」。レンジからカップを取りだし、インスタント・コーヒーを小さじ一杯半いれ、ついでに砂糖も入れる。普段、私は、コーヒーも紅茶も砂糖は使わないが、急ぐ朝は砂糖を使う。熱いコーヒーが胃に広がる。その熱さは体中に広がり、目覚ましとなる。砂糖が入ると、血糖は上り、目覚めが早くなる気がする。もう一度、新聞の活字を追う。徐々に文章が理解できるようになる。

私は朝が苦手だ。起きるのは苦にならないが、起きてからが問題で、30分はボーッとしている。夢と現実との境がない。頭の中はブラック・ホール特異点で、原因と結果がごちゃまぜとなっている。気が付くと、電車の時間だったりする。

今日は、冬休み前、最後の練習日だ。風邪が流行っている。園児もやけに少ない。私もついに熱が出てきた。これで二週間以上の休みに入ってしまうのだから、何とか気合いを入れてと思うのだが、朝のボーッがどうも直らない。道を歩いていても、本安君達と話をしていても、どこか遠い。大声を出してガキ共に接するが、その声は他人の声だ。結局、思いは実らず冬休みになってしまう。

この私の風邪は、この後三日間39度の熱が続く。そして、それは住職に移り、正月に住職は入院することになる。

年が明け、住職も退院し、八日から新年一発目の練習になる。暮れの終業式の後も、この始業式の後も練習するのだ。園側の気合いの入れようが解る。

『明けましておめでとう。みんな、俺の事、お芝居の事、覚えているかぁ？』

『オーッ』

元気な奴等だ。だが、子供の数が少ないのが気になる。

『インフルエンザ流行っているみたい。』

職員室で耳にする。

『それじゃ、今日は、子供とペンギンのとこやるぞ。』

今頃になって何だが、この芝居は子供とペンギンの話だ。まずオープニング、子供全員と母親四人が横浜の詩を唄う。子供と母親が、お留守番を『しろ』、『しない』で言い争う。結局、ご褒美にプリンを造ってもらうことで、子供はお留守番をするのだが、そこは五歳児、一人での留守番は心細いのだ。その不安を何とかクリアして、おやつの時間に漕ぎ着ける。そしてお約束のプリン

を冷蔵庫から取り出そうとするが、冷蔵庫の中はカラッポだ。そして、あろうことか、その中からはプリンならずペンギンが出てくるのだ。

ペンギンは鳥だ。鳥のくせに飛べない。子供達は一人では何もできない。お互いに欠点を罵り合うが、最後には、みんな励まし合い、仲良く空を飛ぶという荒唐無稽なお話しである。子供達には、20分ぐらいに短縮した紙芝居を見せている。

私は普段、演劇を観る事がない。映画は好きなのだが、芝居はどうも好きになれない。その物語にどこまでのめり込む事が出来るか。そんな舞台はめったにない。

『今日は冷蔵庫のシーンやるよ。君達は今、お留守番をしている。ねェ。怖いけど頑張っていると、ボーン、ボーン、ボーン。3時だ』

『おやつの時間よ』

ノリの良い子はもう入っている。

『そう3時だ。3時には何がある？』

『おやつ』

『プリン』

『そうだプリンだ。よし、冷蔵庫へ急げ！』

『ドーワーッ』

『まだだぞ。まだ扉を開けちゃいけない。』

『エーッ』

七つの巨大な冷蔵庫が舞台の奥に並ぶ。島津君が徹夜で造った力作である。

『よし、冷蔵庫の前に整列。みんな、自分がどの扉を開けるのか解っているな。よし、開けろ！』

『どうだ、プリンはあったか。』

『ない』

『えっ、ないの。どうしたんだろう。さっき冷蔵庫に入れたよなぁ』

『ウソ。』

『よし、それじゃ、もう一度やってみよう』と、こんな風に40人でやる『〜ゴッコ』で進めていくのだ。この間、30人近いペンギン役の子供達は、冷蔵庫裏でスタンバイしている。これが大変で、冷蔵庫の扉を開けて顔出したり。喧嘩したり。担任の先生達は走り回っている。それでも、前のシーンがすんなりいって、すぐペンギン登場になれば良いのだが…奴等は、自分の出番を今か今かと心待ちにしているのだ。そんなときに私が、

『もう一回、冷蔵庫あけるまでやり直し。』

なんて言った日には、登場できないペンギン供が舞台裏でブーイング雨嵐を浴せる。何て奴等だ。ちなみにこれはペンギンだけではない。

年あけて、通し稽古（最初から最後まで、途中で止めずに続けて芝居をして、造っていく稽古の仕方。）に入ってからは、ブレーキの壊れたダンプカーのごとく、ドドド、と一気に走る。『あっ、今の駄目だ。よし、ここで切るか。』なんて、悠長に考えていると、物語はどんどん進んでしまって切れる場所ではなくなっている。それでも意を決して、

『ストップ』

なんて言うと、つぎに台詞を言う子供が、

『え――っ』

『先生、私の所なんでやらないのォ』

『ごめん、お昼食べたらやるから』

『絶対だよ』

凄いやる気だ。

『よし、みんな良くできたぞ。昼メシだ』

『ウワーッ』

みんな教室に戻る。よしひさがきた。

『今の失敗だよね。』

『オッ、おう。』

よしひさは、自分が間違えても悔しくて涙ぐむが、全体の出来、不出来も見ているのだ。自分の台詞を言わないと、やっている。こいつ根性悪いのかなと思っていたが、実は、こいつとても頭が良い。飲み込みが早すぎて、劇の前半で、自分の頭の中では全て終わってしまっているようだ。

『つぎ、お前だぞ』

この一月も半ば過ぎて、やっと私の方も落ち着いたというか、全体が見えてきた。もう、横浜までの道程も辛くない。それどころか楽しくてしょうがないのだから困ってしまう。

最初は、紹介プラス頼まれ仕事だったから、まして、過去に何回か別の演出家が創った芝居である。どういう評価が出るのか、とても不安であった。私は小心物だから、気になり出すと、なんとなく先生達がよそよそしく見えたり、職員会議で『誰？あんなの呼んで来たのは！』と本安君（もとやす）が責められているのを想像してしまう。子供達は本当に楽しいのだろうか。もしかしたら俺、必要ないかも…等、とにかく弱気になるのだ。が、しかし、そんな体裁はガキ供には無縁だ。俺も一所懸命楽しむ。ガキ供も楽しむ。それで良い、と、思えたのがやっとこの頃。そうと決まれば怖い物はない。二月四日まで、ブレーキの壊れたまま突進できるのである。

やっとクミちゃんが出て来た。冬休みを挟んで一ヶ月

ぶりである。彼女はフィリピン人と日本人のハーフである。フィリピンのお正月で一ヶ月休んでいた。クミちゃんの役はフライパンママ。子供がプリンを造るときに突然現れる「お助けウーマン」である。六人でこの役をやるのだが、クミちゃんが休んでいる間、振り付けも結構変わってしまっていた。しかし、そんな事は物ともせず、踊る、唄う。間違えても大丈夫。フライパンママ役の子達は、わりにしっかりした自己主張の強い子を選んだのだが、そんな中でも、一ヶ月半の間にリーダーができていて…このリーダー「みさと」というのが、話している音楽の機械操作をしてくれる島津君、それにお母さん方。と、中学生ぐらいの子供と話しているような気になる、そう、怖い先生はいない。島津君は今年25才。ヒョロッしっかり屋なのだ。このみさとがちゃんと面倒を見てくれて感じの色白、爽やか青年で、ちっとも怖くない。そこれるのだ。でも、笑うと前歯が一本ないのであるが…。に、江口ときたら、さぁ遊べってもんだ。

フライパンママは単独で練習できる役柄なので、あまり練習をみる事ができずにいた。子供やペンギンとは別の部屋で、担任の先生が教えてくれていたのだ。ある日、練習のスケジュールで、子供、ペンギンを先生方が、みっちり観る事となり、私の手は空いてしまった。フライパンママ達に、いつも観ないくせに悪いなと思いつつ、

『おっ、今日はこっち観るぞ。』

教室の一部分では、お母さん役のお母さん達が衣装を造っている。

『あっ、ここ、タバコ吸って良いんすか？』

『良いんじゃないの』

『灰皿ないからこれ使ってください。』

ジュースの空きカンをくれる。極楽だ。そう、芝居の稽古中にタバコが吸えないのは辛い。動いて芝居をつけているときは良いが、通しの時など、つい手はポケットを探る。

『さて、始めようか』

ところがである。フライパンママの稽古を観るのは私と

『よし。並べ。順番だ。』

まっ、とにかく、この子らじっくり観るのは初めてだし、

『いいか』と、肉体労働に走る。次はあぁしろ、こうしろと、注文が多い。

みさとが恥かしそうに仲間に加わる。前にも書いたが、この子はお姉さんタイプで、このグループのリーダーだ。小さな弟がいるそうで、そのせいか、子供っぽい遊びは

あまりしない。こっちもなんとなくそんなつもりで接していたが、やっぱり五才児だった。良かった。

練習も残すところ三日となる。こいつらの舞台を早く観たいと思う。まるで自分の芝居のように。いや、自分の芝居は途中で嫌になってることが多い。とにかく、ワクワクする。

だけどフと気付く。三日経つと終わってしまうのだ。私は幼稚園の先生ではないから、終わってしまえば、こいつらと二度と会う事もない。遊ぶこともない。凄く寂しい気持ちになる。面白い本はどんどん読める。だけど、読み進んでいくと、軽かった右手は重くなり、重かった左手は軽くなっていく。左手が軽くなり始めると、逡巡する。これ以上読むと物語は終わってしまう。でも読みたい。そして、一日一頁づつチビチビと読む。本は自分の意思で、読まないで凍結する事もできるが、日にちは勝手に過ぎていく。

『よし、みんな、今まで良く頑張った。本当、凄い、楽しい劇ができた。だから今日は練習しない。そのかわり、みんなのリクエストに応えて、自分以外の役をやっても良いことにするから。いいか、子供の役はペンギンでもフライパンママでも、ペンギンの子はフライパンママでも・・・・・・』

『ウワー』

ものすごい喜びようだ。他山の石、隣の芝生、他人の役は良く見える。でも、ちゃんと出来るのか。心配は無用だった。こいつら小姑のように他人の台詞忘れや、間違いにうるさいが、うるさいだけあって、他人の台詞まで、歌まで、踊りまで全部覚えていたのだ。この期に及んで我々大人は台本を放せないというのに。しかし、単純に驚いているだけでなく、この事をきちんと認識すべきだったと、後々悔やむのだが…。

本番だ。

二月四日。前日、照明、音響、全てリハを終え、準備は万全。嬉しい事に舞台屋さんが、スモークやらシャボン玉を飛ばしてくれるという。予算の都合で諦めていた舞台上の効果を作ってくれた。背景は、島津君と藤枝君の力作。音響、音楽は本安君。何度、完徹したのか。午前中に、完全なリハーサルを行う。その前に、

『やっぱり先に見せておこう。』

『そうですね、いきなり煙やら、シャボンやら、冷蔵庫が動いたら・・・・・』

『想像するだけでも恐ろしい。』

『やっと江口さんも子供が解ってきましたね。』

『じゃっ、収集付かなくならないように先に見せまし

ょう。』

子供達、喜ぶだろうな。証明はきれいだし、シャボン玉は飛ぶし、最高だぜこれは。

だが問題が起きた。三時のおやつの場面、子供役の子達は冷蔵庫のドアを次々に開けてその中を覗く。

『ない。』

と、言ってドアを閉める。六面やった後、舞台中央の大冷蔵庫。この冷蔵庫だけは、後程ペンギンが飛び出してくるため、ドアを閉めないでいた。しかし、スモークを溜めるのに、やはり閉めなければならなくなった。

『まっ、何とかなるよ。』

子供は一度覚えてしまうと、なかなか変更してくれない。

『でも、このグループ、よしひさがいるから。あいつなら大丈夫だよ。』

早速、昼飯を食ってる、よしひさのグループを呼びだし、

『いいか、今までの練習では、このドア、開け放しだったけど、閉めることになったから。』

反応が鈍い。無理もない。リハも終わって、本番直前の変更だ。

『いいか、閉めるんだぞ。それじゃ、やってみよう。』

一回、二回、三回。O・K！

『よし、最後にもう一度。』

完璧だ。もう心配は要らないと思った。そう思ったんだからしょうがない。

どこに居ても落ち着かない。舞台の袖、控の廊下、子供達の楽屋。さぁ、こいつらと顔を合わせるのもこれで最後だ。楽屋にいく。子供達には緊張はない。凄い奴等だ。これで舞台では全開パワーがでる。

『O・K、スタンバイ』

子供達が舞台袖に入る。俺の前を通る。

『俺、ガンバルヨ。』

『楽しんでくるね。』

何人もの子供達が言ってくれた。

「解ってるじゃねぇか、こいつら」

なかなか芝居の世界に入れなかった子供も、今では、人に観せる事、楽しむことが解ってくれたようだ。

「イケーッ、ガキ供」心の中で叫ぶ。

順調に芝居は進む。いよいよ本番直前に変更した、冷蔵庫のドア閉め。

『よし！』

よしひさは完璧だ。

『ゲッ、や、やめれ。』

なんて事だ。よしひさが閉めたドアを別の子供が開けた。また、よしひさが閉める。

『開けとくんだぞ。』
『ちがう、閉めるんだ。』
よしひさの悲痛な叫びが聞こえる。袖にいるスタッフは動けない。煙が出てしまった。
そう。子供達は完璧なのだ。人の場面まで覚えている。練習と違う事は奴等には許せない。変更は全員でやらなければならなかったのだ。
しかし芝居は進む。子供達は、失敗なんて振り返らない。
『翔べーッ』
やったぜ。見事だ。お前ら本当に翔んだぞ。
終わった。
『よし、最後にみんなで、1、2、3で「やったー」って言うぞ』
幕が下りた舞台上だ。
『でも、静かにしてなきゃ。』
そうだよな。再三言った。
『舞台の上では静かにしてないとカッコ悪いからな。』
合い言葉は、
「女の子はうんと可愛く、男はカッコ良く。」
『先生、可愛かった。』
『カッコ良かったか。』
『オウ、最高だよ。』
『1、2、3、』
『やったー!』

了

『白色白光の会云』御案内
五月の『白色白光の会』は、左記の通り執り行ないます。

記

日時・五月十二日（月）
午後一時ヨリ
会云処・順正寺
尚、会では、随時会員を募集しております。
詳しくは、当寺までお問い合わせ下さい。

〒177東京都練馬区石神井町3の17の4
電話03（3996）2064
FAX03（3997）8117
順正寺